

動詞「いう」の条件形の用法 —発話主体の特定性と主節の性質の分析から—

南 紅花

The Use of Conditional Forms of Verb "iu": From the Analysis of the specificity of the speaking subject and the Nature of the Main Clause

NAN Honghua

Abstract

This paper was analyzed that the conditional forms of verb "iu" spreads over a postposition targeted for the compound sentences with "iu" as conditional clause predicate. Whether the speaking subject is a specific person was guessed in a focus and it was analyzed about the nature of the events described in main clauses with the contents of a main clause as a clue. Analysis based on examples, reveals that deviation was judged by the events described in main clauses in case of the speaking subject is an unspecified person and in case of the speaking subject is a specific person, and that the fixed tendency can be indicated.

When the speaking subject of "iu" is an unspecified person, the lexical meaning of the verb "iu" is diluted, and a change occurs to the function, and the phenomenon the form also immobilizes is occurring. For example, it'll be the form of the "～toieba" and the "～toittara". Therefore, the function of conditional forms of verb "iu" as a verb is lost, and conditional forms of verb "iu" is combined with "～to" expressing citation, and it is assumed to take grammatical function, and it can be said that it's shifting to "postposition". In addition, the effectiveness of study method on the specificity of the speaking subject was also suggested.



目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 研究対象と分析方法
4. 分析の結果
5. 発話主体が不特定者である場合
 - 5.1 A. 主節が題目の性質についての叙述であるもの
 - 5.2 B. 主節が条件節での疑問に対する答えについての叙述であるもの
 - 5.3 C-1. 主節が話者の評価についての叙述であるもの—引用のト節の内容への評価
 - 5.4 D-1. 主節が従属節とは異なる出来事の発生についての叙述であるもの—連想
6. 発話主体が特定者である場合
 - 6.1 C-2 主節が話者の評価についての叙述であるもの—発話活動への評価
 - 6.2 D-2 主節が従属節とは異なる出来事の発生についての叙述であるもの—別の事態
 - 6.3 E. 主節が発話主体についての叙述であるもの
 - 6.4 F. 主節が発話相手についての叙述であるもの
7. まとめ

1. はじめに

現代日本語において、動詞の条件形は、基本的に複文のなかで、従属文に表す事象が主文の表す事象が成立するために必要な事象、つまり《条件》であることを表すときに使用される¹⁾。

動詞の条件形の代表的な形としては、「すると」「すれば」「したら」「するなら(ば)」「したなら(ば)」及び「しても」が挙げられる。しかし、形式のうえでは動詞の条件形と同じであるが、その語彙的な面と文法的な面において、《条件》を表しているとは言えない場合があることが既に指摘されている(高橋 1983、2003 など)。たとえば、言語活動を表す動詞「いう」が「すれば」「すると」の形をとる場合、基本的には、用例 1)、2) のように《条件》を表す用法として使用されるが、用例 3)、4) のように《条件》(いわゆる因果関係)を表しているとは言えない用法として使用される場合もある。

- 1) 彼が事件の経緯を正直に言えば、無罪になっただろう。(作例)
- 2) (私が) 事件の経緯を正直にいうと、許してくれた。(作例)
- 3) 北海道といえば、雪まつりが有名だ。(作例)
- 4) 北海道の名産品というと、「白い恋人」だ。(作例)

これらのうち用例 3)、4) のような用法として用い

られる「いえば」「いうと」については、高橋(1983、2003)のほか、松木・森田(1989)、グループ・ジャマシイ(1999)、藤田(2000)などでも、その意味と用法が明らかにされている。しかし、用例 1)、2) との関連性についてはあまり述べられていない。用例 3)、4) についてのこれまでの研究では、後置詞化する場合のみが扱われたり、中止形(「し」または「して」の形)の派生的な用法との比較がされたりしていた。

本稿では、これらの研究結果を踏まえつつ、動詞「いう」の条件形の特徴を明らかにするため、早津(2012)の研究方法を参考にしている。早津(2012)は、使役動詞が条件形をとって条件節述語となっているものを取り上げ、主節に述べられる内容を手掛かりにして、使役主体が特定者である複文と不特定者である複文とでどのように性質が異なるかについて考察している。早津(2012)は使役に関する研究ではあるが、その研究方法は本稿の動詞「いう」の条件形の特徴を明らかにするためにも有効であると考ええる。本稿では早津(2012)にならい、文の諸要素の意味的・機能的性質と文の意味との関係を考察する。

2. 先行研究

言語活動を表す動詞「いう」の条件形の後置詞化に関する研究としては、高橋(1983、2003)が挙げられ

る。本稿では、動詞の条件形から後置詞化したものを機能の面から分類している高橋(1983)を取り上げる。

高橋(1983)は、「後置詞」を「単独では文の部分とならず、名詞の格の形とくみあわさって、その名詞に一定の構文的な機能をはたさせる役わりをになう補助的な単語」としており、本稿でもそれに従う。高橋(1983)では、動詞の中止形²から転成した「(～に)において」「(～を)めぐって」などだけではなく、動詞の条件形から転成した「(～と)いうと」「(～から)みれば」なども「後置詞」として認め、後者を機能の面から、大きく《話題をさそいだすもの》と《観点をひきだすもの》との2種類に分けており、さらにそれぞれ以下のように下位分類を行っている。分類で使用されている下線は高橋(1983)によるものであり、本稿の研究対象である動詞「いう」と関係する分類は囲み線で示す。

《話題をさそいだすもの》

(a) きっかけのなげかけ

～というと、～といえば、～といったら

- ・新聞記事といえば、先日小林秀雄氏が逝去された記事を見た。

(b) 主題のなげかけ

～というと、～といえば、～といったら、など

(b1) 先行題目になる

- ・闘牛というと、それを知らない人は何かひどくがらのわるいことのように思いがちですが、けっしてそんなものではありません。

(b2) 主体になる

- ・君江さんときたらじつにのんきだからな。

(b3) 状況になる

- ・シンガポールとなると、ちょっと外遊するぐらいの心じたくをしなければならない。

(b4) 対象になる

- ・ひとをひとともおもわぬ面魂のその男が、人命をつかさどるお医者様となると、哀願的な身のこなしでほそそと話しをしている。

(b5) 数量になる

- ・君はきつすいの新聞記者だからそういうが、十万、二十万となると、そうたやすくはうごかないからな。

(c) 対象的な主体のなげかけ

～にかかると、～にかかったら、～にかけると、など

(c1) あいて、対象となる

- ・あいかわらず、女にかけるとダラシがないんだな。

(c2) うけみの動作者のようなものになる

- ・腕の一本や二本、奴らにかかったらたちどころだからね。

《観点をひきだすもの》

(d) 出典のさしだし

～をみると、～でみると、～によると

- ・「町人身体柱立」という本をみると、その中にも同じような意味の歌がある。

(e) 制度のさしだし

～によると、～によれば、～にしたがえば

- ・原則によれば

(f) モデルのさしだし

～でいえば、～でいうと

- ・それは、日本の大学でいえば助教授にあたるような地位です。

(g) サンプルのえらびだし

～によると、～によれば、など

- ・私は時によとそれを善意に解釈してみた。

(h) サンプルのおいだし

～をのぞくと、～をのぞけば、～を別にすれば

- ・学校までの道すじをのぞけば、東京じゅうで一番なじみの街だ。

(i) 立場のえらびだし

～からいうと、～からいえば、～からいったら、など

- ・わたしたちからいうと、お父さんはまったく精神に異常ありといたくなるのよ。

(j) 側面のぬきだし

～からいうと、～からいえば、～からいったら、
など

- ・性質からいうと、Kはわたしより無口な男でした。

(k) 比較の基準の設定

～にくらべると、～にくらべれば、～にくらべたら、など

- ・これにくらべると近代文学などはよほど淡泊だ。

(l) 資格の基準設定

～にすると、～にすれば、～にしたら

- ・水俣病にすれば、認定の時間的なものがあわんとじゃなかでしようかなあ。

また、高橋（1983、2003）は、動詞の転成をめぐって、次の三つの特徴を指摘している。①名づける意味が変わる。②機能の変化や固定化が起こる。③形態論的なカテゴリーのシステムが変わる。そして、高橋（1983、2003）は動詞の条件形から、後置詞、陳述副詞、接続助辞が発達することを述べており、「いう」の条件形の場合、後置詞化、陳述副詞化（例えば、実をいえば、など）していることを指摘している。

3. 研究対象と分析方法

本稿で研究対象とするのは、動詞「いう」の条件形が条件節の述語となっている文である。本稿で扱う「いう」の条件形は、「いう」が「いえば」「いうと」「いったら」「いうなら」「いったなら」「いっても」の形になったものである。国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を使用し、検索アプリケーション「中納言」を利用して用例を収集した。なお、検索対象を

「コア」に設定した。

なお、分析にあたって、「～というならともかく」「～というならまだしも」などと、文頭にくる「そういえば」「逆にいえば」「何かといっても」などのような慣用表現を研究対象から除いた。したがって、本稿で扱う用例数を表に示すと以下の表1のようになる。以下、「すると」「すれば」「したら」「するなら／したなら」「しても」を述語とする従属節を便宜的に、「と節」「ば節」「たら節」「なら節」「ても節」と呼ぶ。

分析方法としては、早津（2012）にならい、主節で述べられる事態の性質について分析を行い、動詞「いう」の条件形の特徴を明らかにする。

まず、「いう」の発話主体が特定できるか、特定できないかに焦点を当て、発話主体が特定できない場合を主な分析対象とし、両者における複文の性質の相違点を考察する³。

発話主体の特定性⁴について、発話主体が文中や前後の文脈で現れている場合（用例5、6）と、文中や前後の文脈に現れていないが前後の文脈から読み取れる場合（用例7、8）は、発話主体が特定者であると判断することとした⁵。

5) マンションに着き、携帯から彼女に電話をすると、彼女はすぐに下に降りてきた。ジーンズにTシャツ、肩からポシェットを下げている。わたしは車に乗り込んできた彼女にいった。「そういった格好も似合うね」（小説寶石）

6) 部屋に戻って間もなくだった。ノックの音で範子がドアをあけると、ホテルの従業員らしき女が二人立っている。何を言っているのかわからなかったが、相手をしていた範子が振り向いた。（週刊朝日）

表1 動詞「いう」が条件節述語である文の各条件節の用例数

条件節	と節	ば節	たら節	なら節	ても節	計
用例数	79 (29.0%)	89 (32.7%)	10 (3.7%)	17 (6.3%)	77 (28.3%)	272 (100.0%)

用例5)では、「いう」の発話主体が文中に、用例6)では、「いう」の発話主体と推測できる人が前の文脈に現れている。しかし、以下の用例7)と8)では「いう」の発話主体が文中や文脈に現れていないものの、前後の文脈から読み取れる。用例7)は康次が娘たちに天狗の話をしている間に、ママが寝てしまった場面であり、発話主体が「康次」で、発話相手が「娘たち」であることがわかる。用例8)は、「協子」が一人で子育てをするのに不安を感じ、弱気なことを言ってしまったことを表し、文脈から「協子」が自分に言ったことであると判断できる。

- 7)(…) 康次は退屈している娘たちに天狗の話などを適当に作って話してやっている。その声を聞きながら、いつの間にか寝てしまったことがある。覚えているのは、霧が出ていたことと、康次が皮肉っぽく言った言葉だった。見ていてごらん、ママはここらで寝るよ。その時は何を言っているのだろうと思ひながら、睡魔には勝てなかった。(週刊朝日)
- 8)ひとりで働き、ひとりで子育てする。産むと決心した時は、その覚悟がちゃんとできていたはずなのに、再び不安でたまらなくなる。あ…。協子は思わずお腹に手をやった。子供が暴れている。手と足をばたばたさせて、協子のお腹の内側を叩いている。抗議のように思えた。今更、何を言っている。何を迷っている。協子はお腹をさすりなが

ら、子供に声を掛けた。ごめんね、弱気なことを考えて。(青春と読書)

一方、以下の例9)～11)のように発話活動が行われていないため、「いう」の発話主体が存在しない場合は、発話主体が不特定者であると判断する。例9)～例11)は引用のトと「いう」が組み合わさってひとまとまりになっているといえよう。例9)では「いう」の条件形が後置詞的な役割を果たしており(高橋1983でいう<(a)きっかけのなげかけ>にあたる)、例10)と例11)では「という」がひとまとまりになって、それぞれ連体修飾的、助動詞的な役割を果たしている。

- 9)六十年あまり前の千九百四十三(昭和十八)年といえ、第二次世界大戦の敗色が次第に日本を覆い始めたころです。(中日新聞)
- 10)ユーカラでは、人が死ぬと(…)西に昇天した魂は再びこの地上にもどることはできない、などという話が語られている。(梅原猛著作集)
- 11)文面は日付入りの日記風で、「死ぬ理由はない。あえていえば。疲れたから」「生きてる理由はない」などと書かれていたという。(産経新聞)

条件形の「いう」の発話主体が特定者であるか否かを以上の基準に従って、研究対象である用例を分類すると以下の表2のような分布が得られる。

表2 発話主体が特定者、および不特定者である場合の各条件節の用例数

	発話主体が不特定者	発話主体が特定者	計
と節	58	21	79
ば節	85	4	89
たら節	5	5	10
なら節	15	2	17
ても節	74	3	77
計	237	35	272

そして次に、主節の内容、すなわち主節において「いう」の発話主体について述べられているのか、「いう」の発話相手について述べられているのか、「（いう」の前の）引用のト節内容について述べられているのか、といったことを手掛かりにする。先の用例 1)～3) の主節では、それぞれ、「いう」の発話主体について、「いう」の発話相手について、引用のト節の内容（題目の一部）の性質が述べられている。

1) 彼が事件の経緯を正直にいえば、無罪になっただろう。

発話主体

2) (私が) 事件の経緯を正直にいうと、許してくれた。

発話相手

3) 北海道といえば、雪まつりが有名だ。

ト節内容の性質(題目の性質)

C. 話者の評価についての叙述であるもの

- ・北海道といえば、住みやすい。
- ・北海道の面積は東京の約 40 倍であるという、わかりやすい。

D. 出来事の発生についての叙述であるもの

- ・北海道といえば、昨日李さんから「白い恋人」をもらったよ。
- ・部長が李さんに「明日から北海道出張だ」と言ったら、周りが騒ぎ始めた。

E. 発話主体についての叙述であるもの

- ・「私も北海道に行きたい」といえば、連れて行ってもらえたのに。

F. 発話相手についての叙述であるもの

- ・「北海道に行きたい」というと、チケットを買ってくれた。

4. 分析の結果

主節の内容をおおむね以下のような A～F の 6 種類に分類し、簡単に作例をあげておく。

A. 題目の性質についての叙述であるもの

- ・北海道といえば、雪まつりが有名だ。

B. 条件節の疑問に対する答えについての叙述であるもの

- ・北海道の名産品は何かといえば、「白い恋人」だ。

主節の内容の 6 分類に沿って、3 節で述べた研究対象を分類した結果、以下のようにまとめることができる。各類の用例数を示すと以下の表 3 のようになる。

以上の表 3 からわかるように、「いう」の発話主体が特定者か不特定者かによって、主節で述べられている事態に偏りがみられる。発話主体が不特定者である場合、「A. 題目の性質についての叙述」(167 例)と「B. 条件節の疑問に対する答えについての叙述」(36 例)の合計(203 例)が全体(237 例)の 85.6%を占めているが、「E. 発話主体についての叙述」と「F. 発話相手についての叙述」はそれぞれ 5 例と 21 例にと

表 3 動詞「いう」が条件節述語である文の主節で述べられている内容の分布

主節の内容	発話主体が不特定者	発話主体が特定者
A. 題目の性質	167	—
B. 条件節の疑問に対する答え	36	—
C. 話者の評価	21	4
D. 出来事の発生	13	5
E. 発話主体	—	5
F. 発話相手	—	21
計	237	35

話相手についての叙述」は用例がみられない。一方、発話主体が特定者である場合には、「E. 発話主体についての叙述」と「F. 発話相手についての叙述」（主体5例＋相手21例）の合計（26例）が全体（35例）の74.3%を占めており、かなりの高い割合であるが、「A. 題目の性質についての叙述」と「B. 条件節の疑問に対する答えについての叙述」の用例はみられない。

「C. 話者の評価についての叙述」と「D. 出来事の発生についての叙述」は発話主体が不特定者である場合と特定者である場合の両方で用例がみられる。詳しいことは後述するが、両方のそれぞれの評価と出来事の性質が異なっていることがわかる。次節から詳しく検討する。

なお、以下で用例を示す際に、下線や囲み線を用い、それぞれ動詞、発話主体、発話相手、引用の下節内容、主節で述べられている内容で示す。ただし、各節での用例は、各節でそれぞれ注目する成分のみ表示する。

5. 発話主体が不特定者である場合

「いう」の発話主体が不特定者である用例は表2でみたように、全部で237例であり、全例の272例の87.1%を占めている。それらについて、主節で述べられている内容をみると、表3からわかるように、「A. 条件節（あるいは文脈）で示された題目についての叙述であるもの」が167例で最も多い。そして、「B. 条件節で示された疑問に対する答えについての叙述であるもの」は36例あり、「C. 評価についての叙述であるもの」は21例、「D. 出来事の発生についての叙述であるもの」は13例である。

5.1 A. 主節が題目の性質についての叙述であるもの

Aタイプは167例（と節：33例、ば節：64例、たら節：4例、なら節：13例、ても節：53例）である。このAタイプでは動詞「いう」の条件節が引用を

示す「Nと」とくみあわさって「～という－条件形」の形をとるのがほとんどである。ここでの「～という」とは高橋（1983）でのべた《(b1) 先行題目になる》という役割を果たしていると考えられる。従属節「Nという－条件形」の内容を受けて、そこから考えられる特性や性質が主節で述べられている。「Nと」の「N」は題目となり、主節では題目である「N」の性質について述べられている。つまり、テーマレマの関係を成している。これらの「～という」とは「～は」と言い換えても違和感を感じない。たとえば、用例12)は「患者用の図書は、暇つぶしの雑誌や小説が多い。」とも言い換えられ、用例13)は「女性部は、とくく生活部門と結びつけがちです。」とも言い換えられる。用例14)～19)も同様にいえるだろう。

- 12) 患者用の図書というと、暇つぶしの雑誌や小説が多いが、ここには、医学関係の書籍が三百冊、パンフレット五十種類が並んでいる。(サンデー毎日)
- 13) いまの農業は、兼業ではもちろん専業でも女性の担っているところが多いのが現実です。女性部というと、とくく生活部門と結びつけがちですが、営農の担い手という立場から、JAにどしどし意見を出してほしいのです。(家の光)
- 14) これまで柔道の試合といえば柔道クラブの道場か、せいぜい共済会館の小さな部屋で行われたので、よく見えないとか換気が悪いという前出のような苦情が出た。(世界にかけた七色の帯)
- 15) ヨーロッパの三大バカンスといえば夏休みシーズンとクリスマス、そして春先の復活祭のお休みで、移動祝祭日である復活祭はニホンのゴールデンウィークさながらの民族大移動が行なわれる。(どこにいたってフツウの生活)
- 16) ディズニーランドといったら、老若男女を問わず、みんな童心に帰って遊ぶところじゃない。(小説宝石)
- 17) やっぱりさ、うまいものが集まっているっていったら、銀座って感じしない？ (POPEYE)

- 18) 神社と いってもいろいろありますから一概には
いえませんが、手当たり次第に願をかけるのはあ
まりお勧めできることはありません。(霊能者)
- 19) クジラはヒゲクジラ類と歯クジラ類(イルカもこ
こに含まれる)に分類されますが、クジラと いっ
てもすべてが大きいわけではありません。(鳥羽
水族館館長のジョーク箱)

また、以下のような用例では、上の用例とは異なっ
て引用のト節中に題目にあたるもの(「成功した例」「政
府のやること」)が「～は」という形で示されているが、
ここでの「～は」は係助詞として入っており、上述の
用例 12)～19)の一種のバリエーションであるといえ
る。ただし、これらの用例でも主節ではその題目にあ
たるものの性質を述べており、テーマレーマの関係を
成している。

- 20) では、日本の歴史において、こうした政治的ドー
ダの一点突破全面展開が 成功した例はと いうと、
それは幕末の尊王攘夷運動に尽きる。(一冊の本)
- 21) しかし、政府のやることはと いえば、結局、毎年
何百万ポンドも投じて、国民文化にとって一番よ
いとされるものを、強要しようとするだけなので
す。(義務教育という病い)
- 22) その対立は、もとはと いえば同じ田舎者同士で
あったから、余計激しかったと想像される。都会
人に化けた田舎者ほど過激に都会化するものはい
ないからである。(一冊の本)

以下の「ても節」(例 23、例 24)に関しては上の用
例と異なる構造「～はなんといっても、～」を成し、
慣用句的であるが、テーマレーマの関係を成している
ことは上述の諸タイプと一致している。

- 23) もっとも注目されるのは なんといっても英国の
ロイヤルファミリーだが、 四つを組むのはモナコ
公国の皇室の人々だ。(どこにいたってフツウの
生活)

- 24) ローカルな人々が食するのは これはなんといっ
てもお弁当。(どこにいたってフツウの生活)

一方、以下の例では「Nは、～で／からいう－条件
形」という構造を成しており、「いう－条件形」が「～
で／から」に後続して《観点》などを限定し、高橋
(1983)でいう《観点をひきだすもの》にあたる。し
かし、主節では同じように題目の性質について述べら
れているので、ここに分類する。

- 25) その意味では、罪の意識というのは、感情でい
えば「恐怖」「驚愕」「怒り」のすべてが入っている
ような気がします。(教育再生！)
- 26) 多くの親の願いは、一言でいえば子供をいい大学
に入らせるということ。(教育再生！)
- 27) 陰陽寮は 今で言うなら、政治家にとって欠かせ
ないブレイン集団であり、先端の科学技術庁でも
ある。国家の秘密を握る陰陽の術は、民間で勝手
に学ぶことは固く禁じられていた。(安倍晴明)
- 28) つまり、僕には、保坂さんの文体も、 この言い方
で言うなら、蓮實という人の批評の文体と同様、
「全体として空疎である」、「情報量」が非常に少
ないことに、その特徴がある、と思われるのです。
(一冊の本)
- 29) 私は、 今まで何百人もの人に喫煙を中止させるこ
とに成功しました。喫煙が原因と考えられる病死
の確率からいっても何十人もの命を救ったことに
なります。(プライベートドクターを持つという
こと)

また、以下の例では、条件節での事態と、主節で述
べられている事態が同じ事態を示している。用例 30)
では、条件節での「結論」がどういう結論であるかに
ついて、主節で述べられている。すなわち、「結論＝
まだ五月中に(…)としかわかっていない」というこ
とである。したがって、「結論は、まだ五月中に(…)と
しかわかっていない」というテーマレーマの関係を
成していると考えられる。用例 31)～33)も同様に

説明できるだろう。用例 30)～33)では「N－格助詞いう－条件形」というかたちをとるが、用例 34)では「Nについていう－条件形」という形をとる。ただし、テーマレーマの関係を成しているのは 30)～33)と同様である。

- 30) 結論から 言うと、まだ五月中に行われるというだけで、枚数も数万枚以上十万枚ぐらいまで、としかわかっていない。(産経新聞)
- 31) アメリカのサマーキャンプは高校生が参加したりするものもありますが、本当のことを 言えば、小学生のうちにやらないとあまり意味はないのです。(教育再生！)
- 32) ウサマ・ビンラディン氏の話については「自身の意見を いうなら、多分死亡しているのではないかと思う」と語った。(産経新聞)
- 33) この小説の何が、なぜ動かすのか。僕の答えを 言うなら、その理由は、この小説に、音楽が止んだ後に聞こえる微細な音の世界でしか展開できない劇が進行していて、それが、ほとんどそうとは気づかれないほどの精妙さで、僕たちを説得し、動かしているからにはかなりません。(一冊の本)
- 34) イチローについて いえば、そのバッティングのスタイルだけでなく、ダグアウトで出番が近づき、いよいよグラウンドに足を踏み出し、ウエイティング・サークルに入り、そして打順が来てボックスに歩み寄るまでの細かい所作とその順序、それに間合いが、常に一定の型を持って一定のリズムを刻み、それが打席でのインパクトという最終の動作まで連動しているように見える。(西日本新聞)

以上、「A. 主節が題目の性質についての叙述であるもの」について述べたが、この種の文は条件節（あるいは前文脈）で題目を示し、主節ではその題目について説明を加えその性質が述べられ、いわゆるテーマレーマの関係を成しているということで一致していると考えられる。「いう」の条件形は、題目提示の役割

を担うこともあればそうでない場合もある。「～という－条件形」の構造を成しているのが多く見みられるが、引用のト節を取らない用例もみられた。いずれにしても主節では条件節（あるいは前文脈）で示された題目について叙述しているので、統一してこのタイプを「題目の性質についての叙述」と呼ぶ。動詞「いう」は動詞らしさを失い、語彙的な意味も希薄になっているといえる。

5.2 B. 主節が条件節での疑問に対する答えについての叙述であるもの

B タイプのものは 36 例（と節：25 例、ば節：9 例、なら節：1 例、ても節：1 例）である。このような種類の文は「いう」の条件節が引用のトとくみあわさって「～という－条件形」の構文をなしている。条件節が疑問文（用例 35)～39)は補充疑問文⁸であり、用例 40)、41)は真偽疑問文である）を受けており、主節では条件節中の疑問文に対する答えがのべられている。たとえば、用例 35) の条件節中の疑問文は「節分の夜豆を撒くのはなぜか」であり、答えの「無数の豆を鬼が数え拾ううちに邪力が劣えるからだ」が主節で述べられている。

- 35) また南方は、節分の夜豆を撒くのはなぜかと いうと、無数の豆を鬼が数え拾ううちに邪力が劣えるからだ、と説明する。(黒潮の文化誌)
- 36) では、なぜ荷重が後ろ寄りになるのかと いうと、膝をぴしっと合わせすぎているからだと思われる。(月刊 SKI JOURNAL)
- 37) なぜ、野生のシカが増えたのかと いえば、これも食物連鎖が関係しているのです。(鳥羽水族館館長のジョーク箱)
- 38) この小説の本当の起点は、何か、と いうなら、それは、「僕」が息子の圭太と引っ越してきた「去年の五月」の直前の、「僕」の妻との離婚という出来事です。(一冊の本)
- 39) いくらなんでも母が(…)きっとどこかで佐倉の

ことを知っていたはずだ、と。どこかと言っても、お母さんは大学病院を出た後は名取の町立病院にしか勤めていないのだからどちらかでしょ、と言いつつ、ウン、どちらかだよ、でも、多分町立病院だ、と兄は主張した。(わが愛はやまず)

40)医療機器の充実度や職員の数など、表層的な面を目安にするのが一番簡単ですが、それが満足度に比例するかという、そうではない。(サンデー毎日)

41)しかし、学校から帰る途中に子供同士で遊ぶかといえ、答えはノーです。(教育再生！)

5.3 C-1. 主節が話者の評価についての叙述であるもの—引用のト節の内容への評価

C-1タイプのものは、21例(ば節：6例、たら節：1例、ても節：14例)である。「いう」の条件節が引用のトとくみあわさって「～という—条件形」の構文をなしており、主節述語は評価的な形容詞(あるいは形容詞句)である。こういう場合、主節では引用のト節の内容についての話者の評価が述べられている。たとえば、用例42)の「留学といえば聞こえはいい」では、主節の評価「聞こえがいい」というのは、「留学」という行為に対する評価であり、「留学する」と発話する行為に対する評価ではない。この点が次節(6.1節)で述べる発話主体が特定者である場合との相違点でもある。用例43)、44)も同じように解釈できる。

42)留学といえば聞こえはいいが荷物を入れる船艙に寝起きする旅行であった。(世界にかけた七色の帯)

43)人間的といえば聞こえはいいが、要はお節介でおしゃべりなのである。こういうタイプが嫌いな人もいる。(弁護士む〜みんの解決！女の一大事)

44)エレクトロニクス産業は三端子デバイスによって誕生したといっても過言ではない。(復活！日本の半導体産業)

しかし、以下の用例45)と46)では「Nとといったらいい」「Nといってもいい」という構造をなしているが、その全体の意味が「N(と呼ぶの)が適切である／ふさわしい」という意味にずれており、慣用的に使われていると考えられる。ただし、主節が引用のト節の内容に対する評価であることは同様である。

45)しかし、打つのは一歩譲っても負けたくないから、いま取り組んでいるのが太鼓の創作。作曲といったらいゝのか？芸術性を追究するだけではなく、老いも若きも誰でもがたたける、二、三分の短いもの。(産経新聞)

46)私は現代の婚姻制度に反対であり、また、現代の葬式の考え方は、野蛮と言ってもいいほどぞっとする醜いものだと思っている。(魂の燃ゆるまに)

5.4 D-1. 主節が従属節とは異なる出来事の発生についての叙述であるもの—連想

D-1のタイプのものは13例(ば節：6例、なら節：1例、ても節：6例)である。条件形で示された話題(あるいは事態)をきっかけにして、主節ではそこから思い出した、あるいは連想された出来事が述べられている。例えば、用例47)では、条件節で「砂漠」という話題を取り上げ、主節ではその「砂漠」から思い出した「私たちが子どものときは童謡の『月の沙漠』をよく歌いました」という子どもの時の思い出を述べている。こういう点も後で述べる(6.2節)発話主体が特定者である場合とは異なる。

47)日本もいずれ砂漠化する恐れがあります。砂漠といえば、私たちが子どものときは童謡の『月の沙漠』をよく歌いました。(鳥羽水族館館長のジョーク箱)

48)土方さんといえば、この前タマに会ったよ。土方さんの暗黒舞踏派で踊ってたダンサー。(現代)

49)保名が脇役だというなら、樟葉も同じくらい脇

役で、さらには何億もの命がスポットライトを
けらもあびることのないまま、ただ暗転した時の
舞台の上を通り過ぎていったのだ。(安倍晴明)

- 50) 「グローバル経済の時代」といっても、企業とい
うのは、やはり生まれた国の文化に根ざしているも
のである。(これまでのシックスシグマは忘れな
さい)

以上、発話主体が不特定者である場合を、A～D
のように4つに分類して詳しく考察した。いずれの場
合も動詞「いう」の語彙的な意味が希薄になり、「～
という－条件形」が文法的な役割を果たしているとい
うことができる。

6. 発話主体が特定者である場合

条件形の「いう」の発話主体が特定者である用例は
表2でみたように、全部で35例であり、全例の272
例の12.9%しか占めていない。その中で、「C. 主節が
話者の評価についての叙述であるもの」が4例、「D. 出
来事の発生についての叙述であるもの」が5例、「E. 発
話主体についての叙述であるもの」が5例、「F. 発話
相手についての叙述であるもの」が21例で最も多い。

6.1 C-2 主節が話者の評価についての叙述 であるもの－発話活動への評価

このC-2タイプのものは、4例(ば節:2例、たら
節:2例(2例とも方言の例である))である。主節述
語が評価的な形容詞(あるいは形容詞句)であると、
条件形の《条件》が満たされた際にそれに対する話者
の評価が主節で述べられている。しかし、この場合は、
5.3節で述べた発話主体が不特定者である場合と違っ
て、話者の評価の対象は発話する行為そのものである。
用例51)では話者が「Jspwriter クラスって何?」と
いう質問を持っている人に、「“out 暗黙オブジェクト”
のクラスが Jspwriter だ」と説明したほうが、「わかり
やすい」ということで、説明する行為、つまり発話活

動についての評価を述べている。

- 51) 「Jspwriter クラスって何?」という方には、「out
暗黙オブジェクト」のクラスが Jspwriter だと いえ
ば分かりやすいでしょう。(UNIX MAGAZINE)
52) いずれも原稿なしにしゃべったので、舌足らずな
ものになってしまいました。後になって、ああ言
えばよかったと、反省しきりです。(朝日新聞)

主節が話者の評価についての叙述になっている点
は、前述の5.3節で述べている場合と一致しているが、
5.3節で取り上げた例においては話者の評価とは引用
のト節の内容についての評価であり、本節(発話主体
が特定者である場合)で取り上げている例の場合は発
話主体の発話活動についての評価である点異なる。

6.2 D-2 主節が従属節とは異なる出来事の発生 についての叙述であるもの－別一の事態

条件節で表す発話活動がきっかけになって、発話現
場で別の事態が発生することを主節で述べている例で
ある。このタイプの用例は5例(と節:4例、ても節:
1例)である。発話活動の現場性がはっきりしており、
「いう」の“発話する”という語彙的な意味が保たれ
ている。用例54)は妻である麦子と「われら兄弟」4
人が亡くなったおじいさんのお墓に向かって話してい
る場面で、従属節には麦子からおじいさんへの話が示
され、主節には、その話を聞いたその現場にいる「わ
れら兄弟」の細君たちの動作が述べられている。さら
に、用例54)では、あるお母さんが「私(作者)」に
言ったことを聞いたその現場にいるほかのお母さんた
ちの動作が主節で述べられている。

- 53) 墓の上に北町保存指定樹木となっている樺の裸木
が覆いかぶさっていて、無数の枝の芽が今すぐに
でも弾けそうに脹れていた。「おじいちゃん、と
うとう、今年の花見はできなかったねえ」と麦子
が言うと、われら兄弟の細君たちが泣きだした。

(夕映えの人)

- 54) あるお母さんが、わが子のここがひどい、あそこ
が気に入らないと 言うと、別のお母さんが、そ
んなのまだいいほうよ、うちの子なんかねと、さ
らにエスカレートした話が出てくるのです。そん
なとき私は言います。(「5つの約束」で子どもは
 変わる)
- 55) 山崎氏の党内の権力基盤は弱く、「山崎氏が『了解』と
言っても決まりではない」(森派幹部)と
 も言われる。(読売新聞)

「いう」の発話主体が特定者である場合、主節が「D. 出来事の発生についての叙述」になる例の主節の内容は、発話活動が行われている現場での他の事態の発生についての叙述である。これは、出来事の発生についての叙述であるという点では前述の5.4節で述べたものと同じであるが、5.4節の用例では、引用節のト節の内容から連想された出来事の発生であるのに対して、この節(発話主体が特定者である場合)の用例は、従属節で述べられている「いう」の発話主体の発話活動をきっかけにした他の事態の発生であるという点が異なる。

6.3 E. 主節が発話主体についての叙述であるもの

「いう」の発話主体が特定者である場合、Eタイプのものは5例(と節:2例、ば節:2例、たら節:1例)見られた。条件節で「いう」の発話主体の発話活動が行われており、主節では同じ発話主体の動作や変化について述べられている。「いう」の発話活動が行われている場面がはっきり明示されており、動詞「いう」の“発話する”という語彙的な意味も保たれている。以下の用例56)では「いう」の発話主体である「私」が「吉見氏にお礼をいう」という発話活動を行った後、「手術室を出た」という「私」の動作が主節で述べられている。用例57)も同様に解釈できる。用例58)では発話主体である「(すでにFA権を取得した)松井」が「『行きたい』という」という発話活動を行

う条件が満たされれば、「障害が起こらない」という発話主体の環境の変化が主節で述べられている。

- 56) Mさんの癌が、治癒する可能性も出てきたのである。吉見氏に礼をいうと、私は途中で手術室を出た。手術室の外で、Mさんの兄が私の手を握る。涙が溢れている。(週刊現代)
- 57) もともと、門脈本幹と下大静脈との間には距離がほとんどない。そこに8cmの巨大な癌が居座っている。次第に、門脈の「2枚の膜」と癌との間が窮屈になっていく。出血点も増えてきた。『よし、門脈を切ろう』というと、吉見氏は上腸間膜動脈と門脈の血流を止めた。三十分の間に「頂上の門脈」3cmを癌側に付けて切り、横隔膜に続く背側の結合組織と癌との間を切離した。(週刊現代)
- 58) しかし、いま松井が『親離れ』できず巨人にとどまったら、松井はイチローのようなスーパースターになれずに終わってしまう。松井がこのまま巨人に残留しても、巨人の野手のリーダーは清原です。松井は年々居心地が悪くなるばかりでしょう。ヤンキースは外野手陣が高齢化しており、打てて守れる松井にかなり興味を持っているという。すでにFA権を取得した松井が『行きたい』と言えば、障害はなにもない。巨人はすでに「清原のチーム」になりかかっている。松井は自分の居場所が、だんだんとなくなっていることに気付いているだろう。(週刊現代)

6.4 F. 主節が発話相手についての叙述であるもの

Fタイプのものは、21例(と節:15例、たら節:2例、なら節:2例、ても節:2例)である。条件節では発話活動が述べられており、主節では発話主体から発話をうけた発話相手の動作や変化について述べられている。このタイプも「いう」の発話活動が行われている場面がはっきりしている。

- 59) 針麻酔なので、本人は意識がとてもはっきりして
いて、意外なほど元気に見えました。『よかった
ですね』とわれわれが口々に言うと、この方はた
だただ合掌しました。(人生、考えすぎないほう
がいい)
- 60) 「もう、済んだことです。杉田さんがどう言った
のかはわかりませんが、彼はあなたと結婚して、
子供まで生まれました。それでいいじゃないですか」
真以子が静かな口調で言うと、律子是不意に目の
端を潤ませた。(青春と読書)
- 61) あるキリスト者が、馬に一つの訓練をしました。
「ハレルヤ！」と命ずると、馬が走りだすように。
そして、「アーメン！」と命ずると、馬が走るの
をやめるといふ訓練です。(…) (彼が)「アーメ
ン！」そう言ったら、馬は止まりました。(ひと
りの小さなおともだちが)
- 62) 「お袋がとっておけというなら、とっておくけど
ね」と私は言った。(夕映えの人)
- 63) 僕は、瞳子さんが何を言いたそうと、百パーセン
ト彼女の意思に従うつもりでいた。忘れてほし
いと言うなら忘れるし、それでも彼女が気まず
い思いをするなら出ていくしかないだろう。(IN
POCKET (月刊 [文庫情報誌]))
- 64) ゲームを始めると、子どもたちはもう夢中で取
り組みはじめました。(…) チャイムが鳴ったの
で、『きょうの勉強、これで終わります』と言っ

ても、やめようとしません。「先生、もっとやら
せて」と要求してきます。(授業力)

用例 59)～64) では、条件節で発話主体の発話相手
に対する発話活動が述べられており、主節では発話主
体の発話内容を聞いた発話相手の動作が述べられてい
る。ただし、用例 60) での主節では発話相手の動作が
述べられているが、発話相手の心理的変化もうかがえ
る。

以上、発話主体が特定者である場合について述べ
た。発話主体および発話相手も特定の人物で、「いう」
発話活動が行われている現場性が明確に表れ、動詞
「いう」の“発話する”という語彙的な意味も容易に
読み取れる。

7. まとめ

本稿では、動詞「いう」の条件形の特徴を明らかに
するため、早津 (2012) にならい、主節の内容、すな
わち主節において「いう」の発話主体について述べら
れているのか、「いう」の発話相手について述べられ
ているのか、条件節で示された題目について述べられ
ているのか、といったことを手掛かりにして、主節で
述べられている事態の性質について分析を行った。5
節～6 節で述べたことをまとめ、表 3 を詳しくすると
以下の表 4 のようになる。

表 4 動詞「いう」が条件節述語である文の主節で述べられている内容の分布

主節の内容	発話主体が不特定者	発話主体が特定者
A. 題目の性質	167	—
B. 条件節の疑問に対する答え	36	—
C-1. 引用のト節の内容の評価	21	—
C-2. 発話主体の発話活動の評価	—	4
D-1. 引用のト節の内容から連想された 出来事の発生	13	—
D-2. 発話主体の発話をきっかけにした 他の事態の発生	—	5
E. 発話主体の動作や変化	—	5
F. 発話主体からの発話をうけた発話相手の 動作や変化	—	21
計	237	35

4節でも述べたように、「いう」の発話主体が特定者か不特定者かによって、主節で述べられている事態に偏りがみられる。AとBは発話主体が不特定者である場合のみ見られ、EとFは発話主体が特定者である場合のみ見られた。CとDについては発話主体が不特定者である場合と特定者である場合の両方で見られたが、評価対象や発生する出来事の質が異なっている。発話主体が不特定者である場合、評価は引用のト節の内容に対する評価であり、発生する事態は引用のト節の内容からの連想内容である。一方、発話主体が特定者である場合、評価は発話主体の発話する行為に対する評価であり、発生する事態は発話主体の発話をきっかけにした他の事態によるものである。

「いう」の発話主体が不特定者である場合、発話活動が行われているわけではないため、発話主体と発話相手がそもそも存在していない。従って、発話主体や発話相手についての叙述が見られないのは当然である。一方、「いう」の発話主体が特定者である場合は、

発話主体及び発話相手も文中や文脈に現れたり、文脈から推測できたりして、「いう」の発話活動が行われている現場性が明確に読み取れる。したがって、主節の焦点が発話活動の参加者、発話活動や発話現場にあてやすくなると考えられる。

そして、「いう」の発話主体が不特定者である場合は、動詞「いう」は語彙的な意味が希薄化し、機能に変化が生じ、形も固定化している（「～といえは」「～といったら」などの形になる）。したがって、「いう」の条件形は動詞らしさがなくなり、引用の「～と」と組み合わせさせて文法的な役割を担うようになっていると考えられ、「後置詞」へ移行しつつあるといえる。

本稿では限られた用例の中ではあるが、「いう」の発話主体の特定性に焦点をあてて、動詞「いう」が条件節述語である複文を分析した。その結果、発話主体の特定性によって、複文の性質も異なってくるという一定の傾向を示せたと思う。また、発話主体の特定性をめぐる研究方法の有効性も示唆したといえる。

参考文献

- 安達太郎 (2014) 「疑問」 日本語文法学会 (編) 『日本語文法事典』 p. 153、大修館書店
- 奥田靖雄 (1968～1972) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」 『教育国語』 12、13、15、20、21、23、25、26、28、むぎ書房 (言語学研究会 (編) (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 pp. 22-149 に再録)
- 奥田靖雄 (1986) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文－その体系性をめぐって－」 『教育国語』 87、pp. 2-19、むぎ書房
- 奥田靖雄 (1997) 「動詞 (その1) －その一般的な特徴づけ－」 『教育国語』 2-25、pp. 44-53、むぎ書房
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版
- 言語学研究会・構文論グループ (1985a) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (1) －その1・まえがき－」 『教育国語』 81、pp. 19-31、むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ (1985b) 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文 (3) －その3・条件的つきそい・あわせ文－」 『教育国語』 83、pp. 2-48、むぎ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 高橋太郎 (1983) 「動詞の条件形の後置詞化」 渡辺実 (編) 『副用語の研究』 pp. 293-316、明治書院
- 高橋太郎 (1987) 「動詞 (3)」 『教育国語』 90、pp. 329-347、むぎ書房
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房
- 南紅花 (2020) 「発話動詞「いう」と「はなす」の相違に関する一考察－発話主体と発話相手の特定性をめぐって－」 『東京外国語大学日本研究教育年報』 24、pp. 56-74、東京外国語大学
- 花園悟 (1999) 「条件形複合用言形式の認定」 『国語学』 197、pp. 104-90、日本語学会
- 早津恵美子 (2008) 「人名詞と動詞とのくみあわせ (試論) －連語のタイプとその体系－」 『語学研究所論集』 13、pp. 43-76、東京外国語大学語学研究所

- 早津恵美子（2012）「使役動詞を条件節述語とする文の意味と機能」日中対照言語学会（編）『日本語と中国語のヴォイス』pp. 167-190、白帝社（早津恵美子（2016）「第13章使役動詞条件形の後置詞への近づき」『現代日本語の使役文』pp. 371-394に再録）
- 早津恵美子（2016）『現代日本語の使役文』ひつじ書房
- 河在必（2012）「言語活動を表す動詞「いう」の条件形の脱動詞化」『日語日文学研究』83-1、pp. 429-448、韓国日語日文学会
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書店
- 前田直子（2009）『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版
- 益岡隆志（編）（1983）『日本語の条件表現』くろしお出版
- 松本正恵・森田良行（1989）『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

注

- 1 動詞の一般的な特徴づけ、動詞の条件形の形態論的及び構文論的な位置づけ、つきそい・あわせ文の体系については奥田（1986、1997）、鈴木（1972）、言語学研究会・構文論グループ（1985a、b）を参照している。
- 2 高橋（1983）でいう「中止形」は、いわゆる連用形に「て」のついた形である。
- 3 本稿では、発話相手の特定性については考慮しない。その理由は、予備調査で発話主体が特定者である場合は、発話相手が特定者である場合も不特定者である場合もあり、発話主体が不特定者である場合は発話相手がすべて不特定者であるということがあきらかになったからである。
- 4 本稿で使用している「特定者」と「不特定者」という用語は、ごく日常的な意味で使用しているものであり、「不定人称」等の特定の学派の用語を意識しているものではない。
- 5 特定性の判断基準については南紅花（2020）に詳しく述べている。
- 6 ここでは、「ト節内容の性質」にしたがって、後述（5節）のように「ト節内容」が「題目」の一部であり、「題目の性質」の中に位置づけられる。したがって、次節からは、呼び方を「題目の性質」に統一する。詳しくは5節で述べる。
- 7 「Nといえど」など、後置詞化した「～という－条件形」を、もはや従属節として捉えない立場も存在する。本稿でも「～という－条件形」が従属節らしさが失われつつあると認める。ただし、発話主体の特定性によってなお「～という－条件形」が条件節の役割を果たしている場合もある。「～という－条件形」の用法を網羅的記述を行う本稿では、「～という－条件形」の文法化の進んだものも含め条件節として記述する。
- 8 疑問文の種類については、『日本語文法事典』（2014:153～155）での「疑問¹」の項目（執筆者：安達太郎）を参照している。
- 9 この5.3節と後述の6.1節で取り上げる「～したらいい」「～すればいい」等の前半の動詞条件形と後半の評価的用言の組み合わせが一語化していると認める立場も存在するが、本稿では動詞「いう」の条件形の用法の総体を明らかにすることを目指しており、「いったらいい」「いえばいい」等も「いう」の条件形の一用例として位置づけ、これらについても記述すべきであると判断した。なお、「いったらいい」「いえばいい」等は完全に一語化しているとは言い難い（花園1999で、前半の動詞条件形に否定が現れたり、後半の評価的用言の修飾が可能になったりすることを指摘し、「～したらいい」「～すればいい」等の一体性が崩れていると述べている）。したがって、これらを「～という－条件形」として記述することは必ずしも不適当とはいえない。